



在阪朝鮮人の定住化と生活に関する史的研究 一九一〇年から一九四五年、日本人との関係を中心にして [全文の要約]

著者	塚? 昌之
発行年	2015-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第554号
URL	http://doi.org/10.32286/00000344

平成27年3月期 関西大学審査学位論文

文学研究科史学専攻（日本近世近代史）

2014（平成26）年度博士論文

在阪朝鮮人の定住化と生活に関する史的研究

一九一〇年から一九四五年、日本人との関係を中心にして

03D2304 塚崎昌之

1920年以降、大阪は日本最大の朝鮮人居住地であり、朝鮮人は工場労働や土木労働等で戦前期の大阪の繁栄の下支えをした。1942年末には大阪市の朝鮮人人口は10%を超えた。本学位請求論文は、1910年から1945年の在阪朝鮮人史を、先行研究にはない分量の新聞史料（日本語・朝鮮語）・行政史料・雑誌記事等を集めることにより、教育・住居・医療・信仰・渡航・労働運動・選挙などの具体的な取り組みを通じて、初めて総合的に論じた。

第一部では、朝鮮人の定着の開始と日本人の関わりを論じた。1910年から大阪での朝鮮人の就労・居住が始まるが、初期段階から地縁・血縁を頼る連鎖型移民が多かった。1922年になると急速に朝鮮人への関心が高まり、1923年には済美第四小学校の夜間学級、1924年には大阪府内鮮協和会の公的な取り組みも始まった。これらは、従来、治安・同化目的という評価をされることが多かったが、朝鮮人も事業に加わり、大正デモクラシー期には一定朝鮮人の民族性を認めつつ、「救済」等に役割を果たした。1920年代半ば過ぎまでの朝鮮人の社会運動は、日本労働総同盟や水平社など日本人とのつながりの中で展開された。

第二部では、朝鮮人の民族運動の開始と弾圧を中心に展開した。定住化志向が高まる1927年頃から朝鮮人自らの民族性の強い運動団体が生れ、労働運動や民族教育への取り組みも盛んになった。1930年に入ると、民族主義的色彩の濃い共産主義運動が盛んになり、激しい労働運動が闘われる一方、生活面の運動から朝鮮人の組織化を図った。その動きも警察権力の弾圧に加えて、党派抗争や冒険主義的な闘争方針から、1933年には壊滅していった。

第三部では、「皇民化」の開始から敗戦までを論じた。戦時体制へ移行していく1934年、大阪府は内鮮融和事業調査会を立ち上げ、この頃に育ってきた朝鮮人リーダー層の「近代」化への志向を利用しつつ、「融和」・「救済」から「同化」・「自力更生」へと政策転換を図った。自由が失われていく時代に、リーダー層には日本との闘いではなく、日本社会への参加によって処遇改善を目指す者も多くなり、地域の選挙に立候補する者が現れ始めた。しかし、それは民族文化を捨てることではなく、1934～1936年は朝鮮寺の創建など、戦前期で最も朝鮮文化が表出した時期でもあった。1937年に日中全面戦争が始まると、総動員体制確立に向けて民族性を抹殺しようとする「皇民化」政策が加速されていく。朝鮮人リーダー層などは戦争協力をしたため、「親日」派として評価されてきたが、それは朝鮮人としての地位を日本人に認めさせ、自分たちの文化を残そうとする行動の側面もあった。

以上、戦前期の朝鮮人社会を、従来のような日本人の差別・抑圧、それに対する朝鮮人の闘争・抵抗といった二律背反的な視点ではなく、朝鮮人が朝鮮人として定住化するためにどのような社会を作ろうとしたか、そして、それが日本社会・日本人との接触・軋轢の中で、どのように変容させていったか／いかざるをえなかったかという視点から究明した。